

石造祠からみる民間信仰が形成する空間認知の都市アイデア - 安曇野市道祖神信仰を対象に -

THE IDEA OF A CITY OF THE SPATIAL COGNITIONS FORMED BY FOLK RELIGION IN STONE SHRINES

- Case study of the faith for Dosojin in Azumino City -

佐倉研究室 21W5021A 杉浦虎太郎

Sakura Lab. 21W5021A Kotaro SUGIURA

キーワード：
都市アイデア, 空間認知, 道祖神, 民間信仰, 都市変容

Keywords:
The idea of city, Spatial cognitions, Dosojin, Folk religion, Urban transformation

Based on spatial arrangement features of Dosojin's belief in Azumino city and its transformation of spatial arrangement. The study aims to investigate the relationship between urban spatial cognition ideas and urban space based on Dosojin worship. Using small urban ideas and discovering local characteristics deeply rooted in modern cities, this research is an essential element for Japan's regional cities that demand restructuring urban areas.

1. はじめに

1-1. 研究の背景

日本の多くの地域は農村集落や門前町、城下町、港町などの伝統都市^{注1)}を中心に発展してきた。しかし、大量生産大量消費の資本主義社会の到来によって、生活やインフラは急変し、伝統都市は変容、解体され、伝統都市が作り出した地域特性も変質、消失してきた。近年、人口減少によって都市は再編を求められている。地域の固有性や多様性を活かした住民主体のまちづくりが進められていく中で、現代都市に残る伝統都市の地域特性は重要な要素なのではないか^{注2)}。

1-2. 研究の目的と視点

本研究の目的は、伝統都市において共同で祀られ管理されてきた石造祠^{注3)}の分布状況や空間配置特性に着目し、民間信仰が形成した空間認知を都市アイデアとして捉え、都市空間との関係を明らかにすることである。

伊藤¹⁾は都市空間を規定する空間構造物、個々の人間や社会の意識、行動様式が微小なものを含め「都市アイデア」と称し、都市構造解析方法を提起した。これはRykwertの著書『〈まち〉のアイデア』²⁾において、古代ローマ都市の深層に埋め込まれるその創建時の本源的で明確なアイデアを読み解こうとした方法を援用したものである。伝統都市にみられた多様な都市アイデアは、現代都市においては単純化、単一化、普遍化し、無意識化に重畳し交錯している。これは都市変容過程において人々の意識や行動などの小さい都市アイデア^{注4)}が構造物、都市計画などの大きい都市アイデアに排除され現代都市では潜在化してしまうことに起因する。本研究では、小さい都市アイデアがどのように都市変容に影響を及ぼしてきたかを分析する。小さい都市アイデアと都市空間との関係を明らかにすることは、都市の潜在的な地域特性を捉えなおすことに繋がると考える。

本研究では、民間信仰が形成した空間認知の現れとして石造祠を対象とする。石造祠は堂や石碑、地蔵などの総称である。これらは身近な信仰対象として、長い歴史を持ち伝承されてきた。道祖神信仰は石造祠を対象とする民間信仰の代表的な一つである。道祖神信仰は境界守護神信仰^{注5)}であり、境界の神であるという認識は広く、伝統都市住民の社会的な意識と空間的な意識が確認されてきた^{注6)}。

このような先人たちの空間認知は時代が変化しても、現代都市に道

傍の石造祠として残存している。これらの石造祠が示す先人たちの空間認知を小さな都市アイデアと捉える。石造祠は風化や損傷が激しいものも多く存在するが、設置数は非常に多く、維持管理されている割合が高いため、住民の生活と密接な関わり合いがあり、都市変容過程においても民間信仰が形成した空間認知は都市アイデアとして都市変容を規定してきたと考える^{注7)}。

1-3. 研究の位置づけ

本研究は、伝統都市の都市アイデアに関する研究、民間信仰と都市空間に関する研究から位置づけられる。民間信仰の中でも特に石造祠を対象とした研究が挙げられる。

日本の城下町や門前を対象にした伝統都市の都市アイデアに関する研究は多く蓄積がある。伊藤³⁾は日本の伝統都市の代表的な類型である城下町を都市アイデアという観点から捉えなおし、複数のアイデアが共生しあい、都市が発展する過程を再考した。また、陣内⁴⁾は最も古い時代から都市を構築してきた地中海都市を対象にし、支配者のみならず一般の地域住民が何を大切にしてきたかを考察した。近代都市形成過程の研究は、御壕や城など実空間、地理的物理的観点などの大きな都市アイデアに着目した研究が多く、住民の行動や意識などの小さい都市アイデアに着目した研究は非常に少ない。

民間信仰と都市空間に関する研究は、俗なるもの^{注8)}と対比した「聖なるもの」^{注9)}という視点から、宗教学や民俗学のみならず、建築学、都市計画学においても、まちづくりに用いる研究が行われている。宗教学や民俗学の分野において、Eliade⁵⁾は宗教的人間^{注10)}にとっては空間は物質ではなく、形を成さぬ空間の領域があるとした。これを「聖なる空間」と称した。「聖なる空間」は宗教的人間にとって固定点となり、居住域の選択など、将来のあらゆる方向づけの基礎となる。次に建築学や都市計画学の分野においては、Hester⁶⁾は「聖なる空間」は日常生活の中に潜在的に存在し、人に進むべき方向、世界感、アイデンティティを与え、その土地に根付かせるとした。これらの既往研究は各分野ごとに深化しているが、民間信仰が形成する「聖なる空間」と都市変容との関係に着目した研究はない。

民間信仰と都市空間を結びつけ、「聖なる空間」を示す方法の一つとして、石造祠がある。これらは空間の均質性を破り、「聖なる空間」を作り出す。空間の非均質性は宗教的人間の聖なるものに懐かれた生

を営みたいという思考^{注11)}から現れる。石造祠と都市空間についての研究として、竹内ら⁷⁾⁸⁾の京都における一連の地蔵研究がある。しかし、地方都市を対象にした研究は無い。京都はグリッド状に形成してきた計画都市であることから、都市計画などの大きい都市アイデアに影響を受けやすい。農村集落を中心に発展してきた地方都市に着目することで、民間信仰が形成する空間認知の都市アイデアが発展してきた地方都市はより「聖なる空間」が都市空間に残存していると考えられる。

以上より、本研究は民間信仰が形成する空間認知を都市アイデアとして捉え、道祖神の空間配置特性と都市空間の変容との関係を明らかにする点に独自性を持つ。

1-4. 研究の構成と手法

本研究の構成は以下のとおりである。

2章においては、対象とする安曇野市道祖神信仰について文献調査から現状を整理し、全体を把握する。

3章においては、石造文化財調査の資料⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾から安曇野市旧穂高町域を対象に、道祖神全数の特性と分布状況を整理する。現代における安曇野市道祖神の分布状況と空間配置特性について分析することから、都市空間と道祖神の関係について類型化を行う。

4章においては、3章で古地図を用いて近世から現代までの居住域変容を図式化し、都市空間と道祖神の関係を分析する。

5章においては、3章と4章の分析で明らかになった特性から、現代の安曇野市道祖神信仰の形成した空間認知の都市アイデアがどのように都市空間を規定しているかについて考察をする。

本研究では、安曇野市に残存する道祖神の分布状況や特性について関する資料を基に文献調査と、補足的に臨地調査を行った。道祖神調査に関しては、1993年に実施された石造文化財調査の資料を用いた。石造祠は移設があっても集落内や近い位置への移動が多いと想定し、1993年の調査で記録された位置を年代によって変化していないとして分析する。また、穂高神社境内や大王わさび農園にも多くの道祖神が造設されている。これらは観光用で新たに設置されたもの、記念碑的に設置されたもの、他の地域から移設されたものであるため、対象からは除外する^{注12)}。

2. 調査対象概要

2-1. 対象地区

本研究の調査対象は長野県長野市安曇野市旧穂高町域とする。安曇野市は長野県の中央部に位置し、2005年に豊科町・穂高村・三郷村・堀金村・明科町が合併して誕生した。北は大町市、松川村、池田町、生坂村、筑北村、南は松本市に隣接する(図1参照)。西部は中部山岳国立公園の山岳地帯で、燕岳、大天井岳、常念岳など海拔3000m級の山々が連なり、それらの山々を源とする中房川、烏川、梓川、高瀬川などが犀川に合流する東部は、海拔500～700mの「安曇野」と呼ばれる複合扇状地となっている。扇状地には用水が縦横に開削され、1816年に完成した約15kmにも及ぶ拾ヶ堰^{注13)}は安曇野を豊かな穀米地帯にした¹²⁾。旧穂高町域は現在の安曇野市穂高地域の西部に位置し、1874年に保高町村・保高村・矢原村・白金村・貝梅村・等々力町村・等々力村が合併して誕生した¹³⁾。

2-2. 安曇野市道祖神信仰

道祖神は様々な意味合い^{注14)}を持つものがあるが、その名の通り元来は防塞の神であり、外から襲い来る疫病、悪霊などを村境や峠、辻、

橋のたもとで塞ぐ意味合いが込められている。また、生者と死者、人間界と冥界の境をつかさどる神の意味合いも込められている¹⁴⁾。

道祖神は村集団など共同体によって祀られ、生活空間に身近な信仰対象として管理されることを通して、互いの社会的な意識と空間的な意識が確認されてきた。青森県から島根県まで本州中部を中心に広く分布し、特に長野県は最も道祖神が増設されているが、とりわけそれらは松本盆地^{注15)}に集中している¹⁵⁾。松本盆地のほぼ中心に位置しているのが安曇野市であるが、安曇野市は「道祖神の里」と呼ばれ多くの道祖神が造立されている。安曇野市は近年の工業都市化や松本市のベッドタウン化などから純農村地帯とは言えないが、路傍のあちこちには道祖神などの姿を見ることができ、安曇野市に根付く民間信仰の系譜が強固であったことがわかる¹⁶⁾。

道祖神に関する研究は、宗教学や民俗学の分野で多くの蓄積がある。倉石¹⁷⁾の長野県安曇野市を対象に道祖神の伝播、形態の研究や鈴木¹⁵⁾の道祖神に付随する行事や継承に関して、全国の分布と違いを明らかにした研究等が挙げられる。これらは道祖神信仰や祭礼の歴史的経緯に関して多く研究がされているが、道祖神の配置や都市空間との関係についてなど空間的視点からの研究は十分明らかになっていないとも言えない。また、道祖神は境界に機能する神として解釈をされているものの、近年ではドラマに取り上げられたり、観光資源のシンボルとして用いられるなど、現代都市における解釈の仕方も大きく変化している。

2-3. 安曇野市道祖神の分布

町村誌¹⁸⁾¹⁹⁾²⁰⁾や調査報告書⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾によると、安曇野市における全道祖神は621基である^{注16)}。形態は文字像^{注17)}、握手像^{注18)}、酒器像^{注19)}、その他^{注20)}と分けられる²¹⁾(図2参照)。大きさは様々であり、最も大きい道祖神は高さ210cm、小さい道祖神は高さ21cmが確認されている。621基のうち、417基には紀名銘が刻まれており、造立された年代を把握することができる。

安曇野市道祖神の分布と立年代が判明している道祖神を年代別に地域ごとに比較を示す(図2表1参照)。安曇野市全域に広く分布している。また、造立年代の分布には各地域特徴がある。1790年代には三郷地域が主に造立が始まり、1800年代には豊科地域、1810年代には穂高地域に多くの道祖神が造立されている。1820年代から1840年代は造立が盛んになり、1900年ごろに造立数は収束している。こ

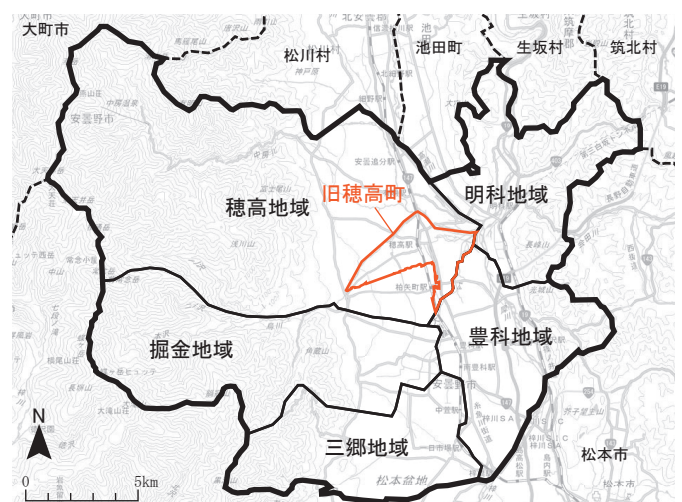


図1 長野県安曇野市地図 (国土地理院地図に筆者加筆)

これは安曇野市が古くから農業を生業にしてきたことが背景にあり、1816年に拾ヶ堰が開削され、各農村が発展していったと考えられる。穂高地域の道祖神は187基である。次に造立数の多い豊科地域の149基と比較すると穂高地域は多くの道祖神が造立されている。安曇野市で最も古い道祖神は1731年に造立された穂高地域の道祖神であり、穂高地域は拾ヶ堰開削前も山からの水を用水を用いて利用できたことから、他の地域よりも早く農村が発展できたと推測できる¹⁰⁾。特



図 2-1 文字碑



図 2-2 握手像



図 2-3 酒器像



図 2-4 その他 (例: 肩組み)

図 2 道祖神の形態 (2021年10月筆者撮影)

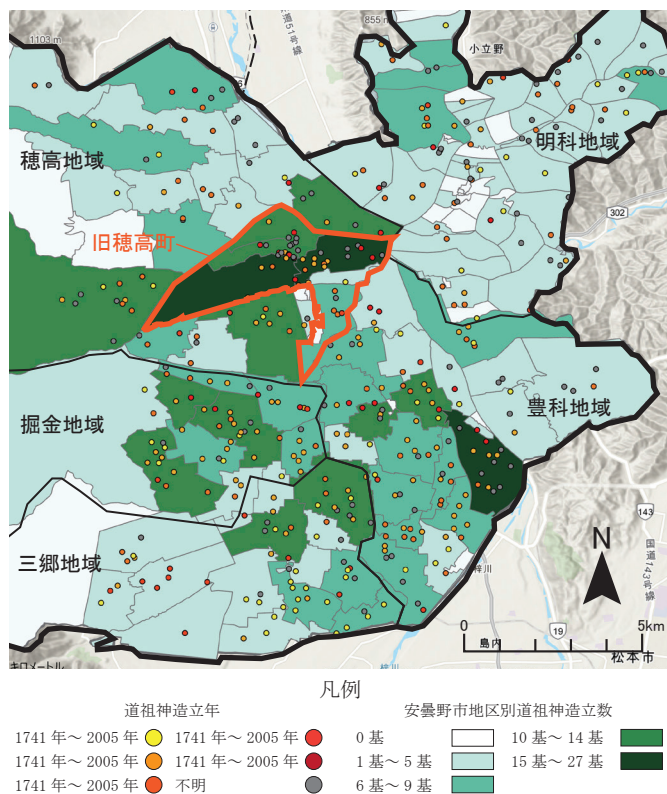


図 2 安曇野市道祖神分布 ©esri JAPAN

に旧千国街道に沿う中心地域である旧穂高町域には75基が造立している。造立数も多く、幅広い年代に道祖神が造立されていることから本研究では安曇野市旧穂高町域を対象とする(図2表1参照)。

3. 安曇野市旧穂高町域における道祖神の空間配置からみた類型

3-1. 安曇野市旧穂高町域道祖神の概況

旧穂高町域道祖神の75基中、観光用や記念碑的に造設された道祖神11基を除いた64基を調査対象とする^{注21)}。旧穂高町域道祖神の分布を示す(図3参照)。造立年が判明している道祖神を年代別に色分けし、道に対する道祖神の配置方向は道祖神の浮彫面^{注22)}を正面として判断し、道祖神の正対する方向を矢印で示した。また、現在の居住域を示した^{注23)}。本章では、旧穂高町域の道祖神と都市空間との関係を明らかにする。まず、いくつかの指標から旧穂高町域道祖神と都市空間の関係を整理する。

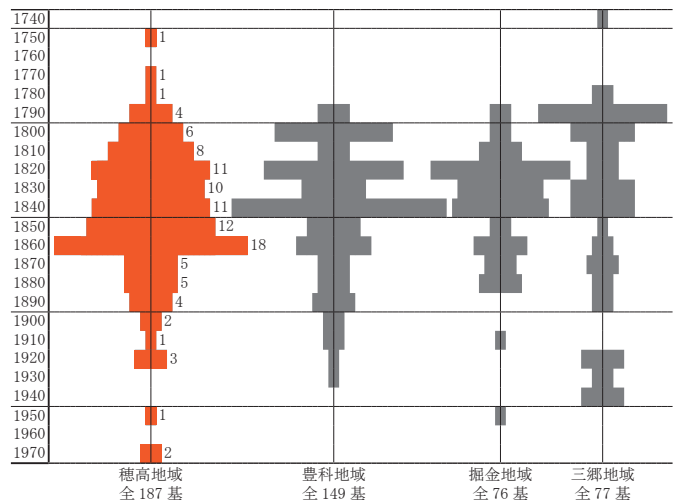
1) 造立年代

現在より200年以上前に造立された道祖神が各地区に現存していることが確認できた。造立年が最も古い道祖神は1771年に造立された穂高町地区のNo.47^{注24)}である。地区ごとに比較をすると、矢原地区は1817年に造立されたNo.3、白金地区は1806年に造立されたNo.9、等々力地区は1819年に造立されたNo.23、等々力町地区は1786年に造立されたNo.37、穂高地区は1818年に造立されたNo.63が地区ごとの最も古い道祖神である。造立年が不明の道祖神が26基あるため、より古い道祖神が存在する可能性はあるが、地区ごとの最も古い道祖神の年代を比較することでいち早く発展した集落を推測できる。旧穂高町域では、No.47の配置する現在の穂高駅以東に存在していた集落がいち早く発展していたことが推測できる。これらの地区は旧千国街道の交通の要所として、他の地区よりも早く集落が発展してきたことが考えられる。

2) 造立位置

旧穂高町域は矢原地区・白金地区・等々力地区・等々力町地区・穂高町地区・穂高地区の5つの地区から構成される。地区ごとに比較をすると、矢原地区が8基、白金地区が4基、等々力地区が16基、等々力町地区が15基、穂高町地区が10基、穂高地区が11基数えられる。分布は穂高駅以東の等々力地区、等々力町地区、穂高町地区に多く分布している傾向がある(図3参照)。

表 1 年代別道祖神数 (参考文献9より引用 筆者加筆)



3) 接道の形態

接道の形態は、1つの道に接する道祖神、2つの道が交わる交差点に接する道祖神、道が分岐する三叉路に接する道祖神に3類型できる。1つの道に接する道祖神は31基、2つの道が交わる交差点に接する道祖神は19基、道が分岐する三叉路に接する道祖神は14基である。地区ごとに比較したが、どの地区も偏りがなく混在している。

4) 道に対する配置方向

ほとんどの道祖神は道に対して直交方向に配置されていたが、道に対して平行方向に正面が向いている道祖神が16基確認した。

5) 形態

文字像が21基、握手像が33基、酒器像が5基、その他の形態が5基確認した。地区ごとに比較したが、どの地区も偏りがなく混在している。空間配置特性を分析するうえで、形態は重要ではないと考えられる。しかし、現在の安曇野市において観光パンフレットでも大きく取り上げられる道祖神は握手像である。これは時代の変化とともに道祖神の認識の仕方が宗教的な視点からモニュメント的な視点に変化していることが推測できる。

6) 基壇

道祖神の基壇をみると、道の傍に地面の上に配置されている道祖神、造設された基壇の上に配置されている道祖神、基壇の上に配置さ

れ屋根がかけられている道祖神に3類型できる。それぞれを「路傍型」、「壇型」、「社型」と命名した。「路傍型」は26基、「壇型」は20基、「社型」は18基を確認した。地区ごとに割合を比較する（図4参照）。「路傍型」は等々力町地区、穂高町地区、穂高地区の割合が高い。「壇型」は等々力地区の割合が高い。「社型」は矢原地区、白金地区は割合が高い。「壇型」、「社型」は「路傍型」に比べて目につきやすく、「壇型」、「社型」割合が高い矢原地区、白金地区、等々力地区は他の地区に比べて道祖神の存在が生活により身近であると推測できる。

3-2. 類型の方法

3-1で整理した旧穂高町域道祖神を対象に空間的な特徴から類型化

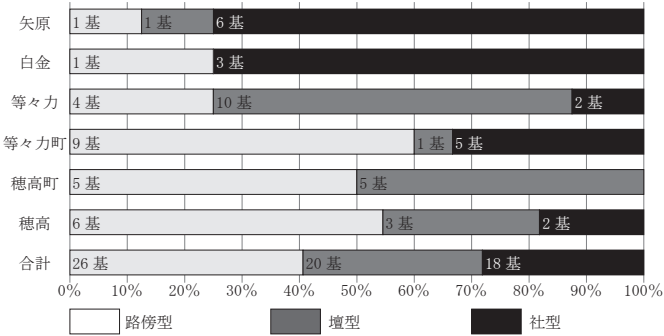


図4 旧穂高町各地域ごとの基壇分類割合

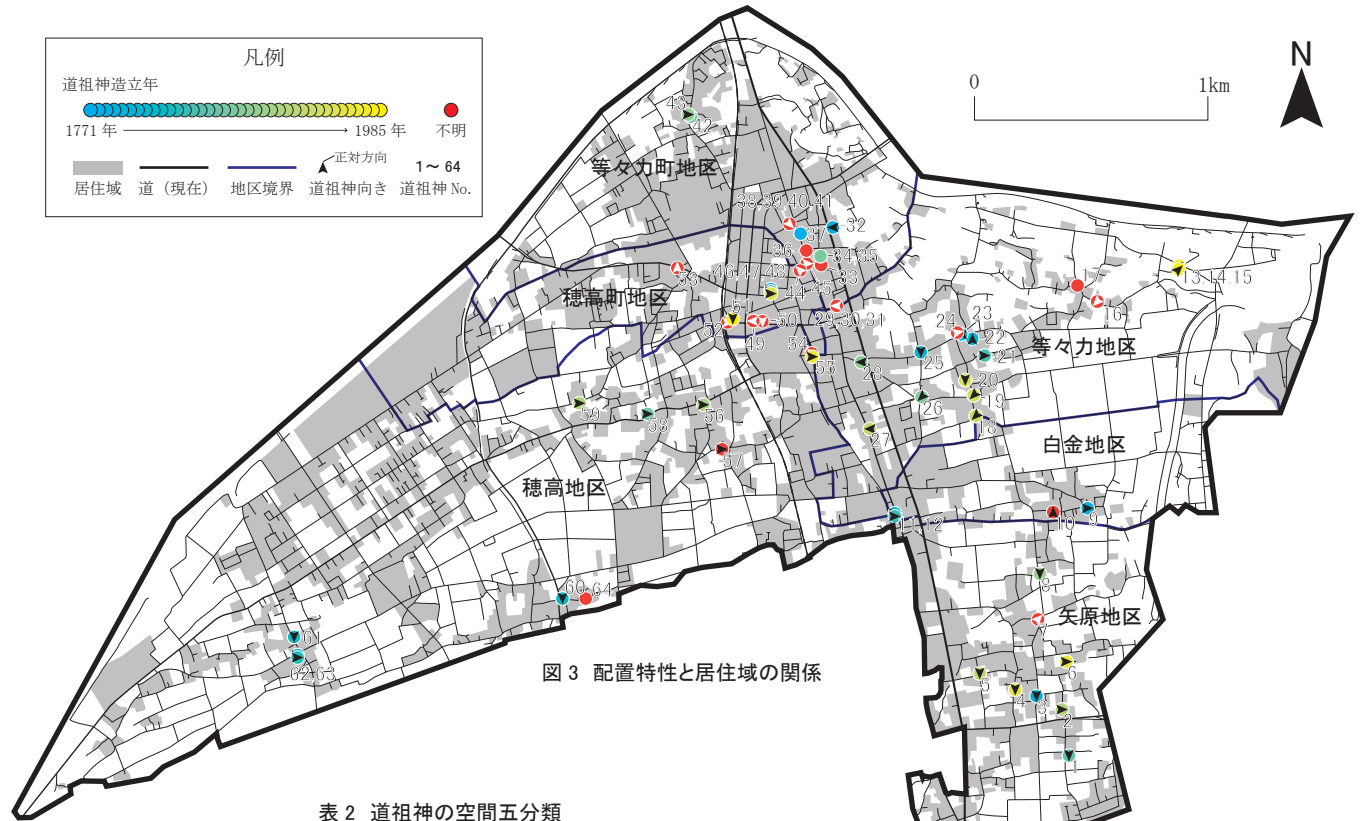


図3 配置特性と居住域の関係

表2 道祖神の空間五分類

分類	1) 直交配置道祖神	2) 平行配置道祖神	3) 交差点道祖神	4) 三叉路道祖神	5) 脇道道祖神
模式図					
No	2, 10, 11, 12, 16, 22, 32, 38, 39, 40, 41, 43, 50, 53 (14件)	1, 4, 8, 21, 24, 29, 30, 31, 38, 39, 40, 41, 43, 50, 53 (15件)	3, 5, 7, 25, 26, 54, 55, 62, 63 (9件)	6, 9, 13, 14, 15, 18, 19, 20, 23 (9件)	8, 27, 45, 60 (4件)

を行う。道祖神の空間配置特性を明らかにする。本章では、旧穂高町域道祖神を接道の形態と道路に対する配置方向から類型化を行う。空間配置特性を明らかにするためには、道祖神単体ではなく、周辺や集落との関係分析が有効であると考ええる。また、Eliade⁵⁾は「場所の神聖を示すには微小で足りる。」としたように、「聖なる空間」を分析する上で形態は重要視しないこととする。

3-3. 空間配置類型類型

旧穂高町域の道祖神と接道との関係を分析した結果、接道の形態と道祖神の配置方向から空間的な特徴を類型化できることが明らかとなった。道祖神の類型方法を示す（表2参照）。64基の道祖神と接道の形態と道祖神の配置方向によって類型を行った。接道の形態は主に道の分岐の数から判断した。接道などが判断できない私有地内の道祖神、移転した道祖神に当てはまる計8基は別類型とした^{注25)}。これらをそれぞれ、「直交配置道祖神」、「平行配置道祖神」、「交差点道祖神」、「三叉路道祖神」、「脇道道祖神」と命名した。

1) 直交配置道祖神 (14 件)

道路に対して直交方向に道祖神の正面が向けられ配置されている道祖神を「直交配置道祖神」と命名した。

2) 平行配置道祖神 (16 件)

道路に対して平行方向に道祖神の正面が向けられ配置されている道祖神を「平行配置道祖神」と命名した。

3) 交差点道祖神 (9 件)

2つの道路が交差する交差点の角地に配置されている道祖神を「交差点道祖神」と命名した。

4) 三叉路道祖神 (14 件)

1つの道路が2つに分岐する位置に配置されている道祖神を「三叉路道祖神」と命名した。

5) 脇道道祖神 (4 件)

1つの道路が小道に分岐する位置に配置されている道祖神を「脇道道祖神」と命名した。

3-4. 旧穂高町域道祖神の空間配置特性について

本章では、安曇野市旧穂高町域における道祖神の配置からみた類型化を行った。地区ごとに割合を比較する（図5参照）。旧穂高町域合計からみると、「直交配置道祖神」、「平行配置道祖神」、「三叉路道祖神」が多く造立していることがわかる。また、「平行配置道祖神」は唯一全地区に造立していることがわかる。

次章では、これらの類型を用いて、道祖神の空間配置特性と都市変容との関係性を明らかにする。

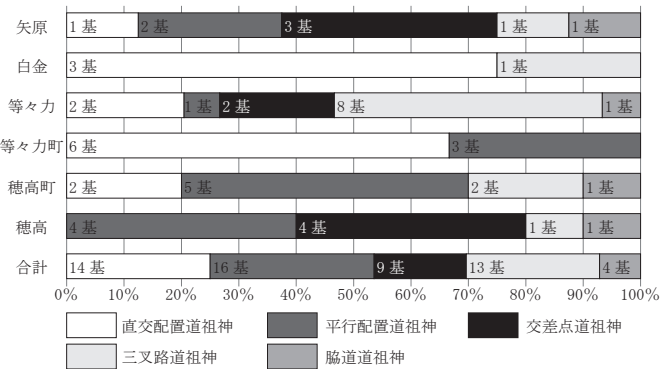


図5 旧穂高町各地区ごとの3章分類割合

4. 道祖神信仰と都市変容

道祖神信仰の都市アイデアと都市構造の変容の関係を明らかにするために3章で明らかにした道祖神の類型、空間配置特性と年代別の居住域の変化に着目する。

4-1. 都市変容と道祖神の配置

本章では、はじめに旧版地図を用い、地図を重ね合わせることで安曇野市旧穂高町域における居住域拡充の変遷を把握した。利用した地図は国土地理院が公開している旧版地図を用いた（表3参照）。1910年から2001年の旧版地図と現在の国土地理院基盤地図情報それぞれの道路をトレースし、建物利用されている土地を居住域として着色することで、それぞれの年代の居住域図を制作した。次に、各居住域図を重ね合わせ居住域変遷図を制作した（図7-1参照）。また、居住域変遷図に3章で整理した情報と3章の類型ごとに色分けした道祖神をプロットした。居住域の変容と道祖神配置の関係について分析する。道祖神信仰には境界を守護する意味合いが含まれるため、居住域の変容と居住域境界に位置する道祖神に着目することで造立時の道祖神信仰が形成する空間認知を明らかにできると考える。

1) 旧穂高町域

対象とした道祖神のうち、1910年時点で造設されている60基中53基が1910年居住域の内側に配置されていることが明らかになった（図7-1参照）。また、道祖神は旧千国街道保高宿^{注26)}と7つの居住域に集中している。これらは新潟と松本市をつなぐ街道であった街道と元々集落が存在していた場所に集中していると考えられる。また、これらの道祖神の年代の造立年に着目することによって、各集落の発展した順番を推測できると考える。各集落の最も造立年が古い道祖神を比較する。旧千国街道保高宿で最も古い道祖神は1771年に造立された旧千国街道保高宿中部のNo.47である。次は1806年に造立された白金地区集落のNo.9である。次に年代はほとんど変化なく、1818年に造立された穂高地区西部集落のNo.63、1819年に造立された矢原地区集落のNo.3、等々力集落のNo.23とNo.25。次に1824年に造立された穂高地区中部集落のNo.60である。次に年代はほとんど変化なく、1833年に造立された等々力町地区集落のNo.42、穂高地区東部集落のNo.58である。よって、発展した順に旧千国街道保高宿^{注27)}、白金地区集落、穂高地区西部集落、矢原地区集落と等々力地区集落、穂高地区中部集落、等々力町地区集落と穂高地区東部集落と推測される。1910年居住域と道祖神の位置関係に着目すると、1910年居住域の境界部に配置する道祖神が22基、内部に配置する道祖神が32基、外部に配置する道祖神が6基であった。

次に3章の類型に着目する。1910年居住域の境界に配置する道祖神22基中10基は「平行配置道祖神」、4基は「交差点道祖神」、3基は「三叉路道祖神」、1基は「脇道道祖神」、4基は私有地に配置され類型できない道祖神であった。「直交配置道祖神」は0基であった。特に「平行配置道祖神」は16基中10基が1910年居住域の境界に配置されている。これは「平行配置道祖神」、「交差点道祖神」、「三叉路

表3 調査に用いた地図

資料名	図名	縮尺	測量年
大日本帝国陸地測量部 2.5万地形図	豊科、有明村、小倉、明科	1/25000	1910
	豊科、有明、信濃小倉、明科	1/25000	1931
	豊科、有明、信濃小倉、明科	1/25000	1974
国土地理院 2.5万地形図	豊科、信濃小倉	1/25000	1983
	有明、明科	1/25000	1990
	豊科、有明、信濃小倉、明科	1/25000	2001
国土地理院 基盤地図情報	543736、543737、543746、543747	無	2022

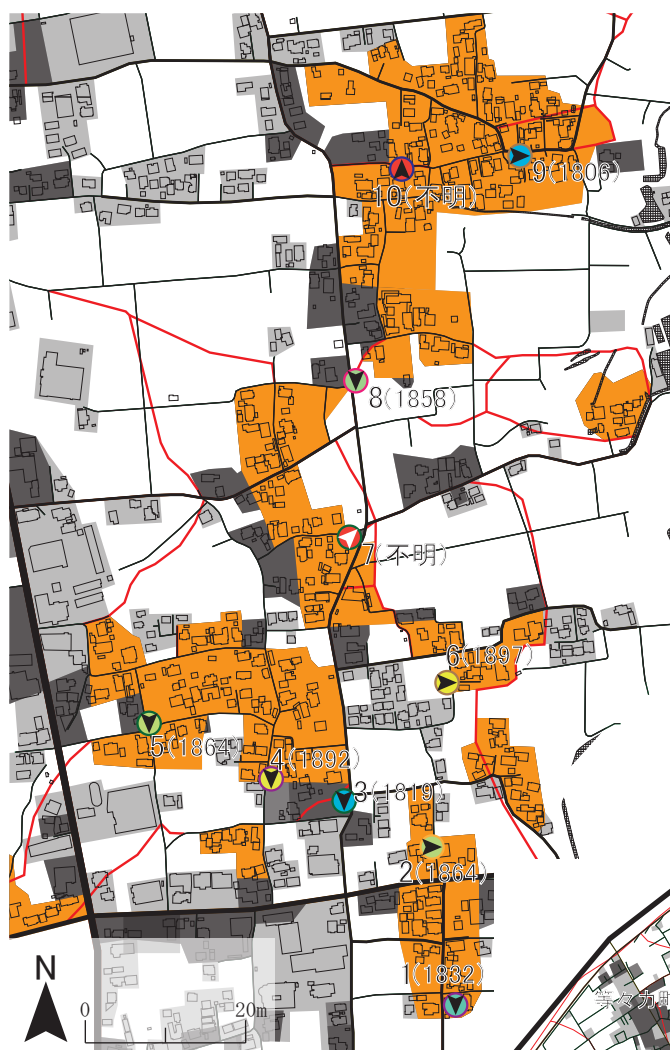


图 7-2 矢原地区白金地区拡大図

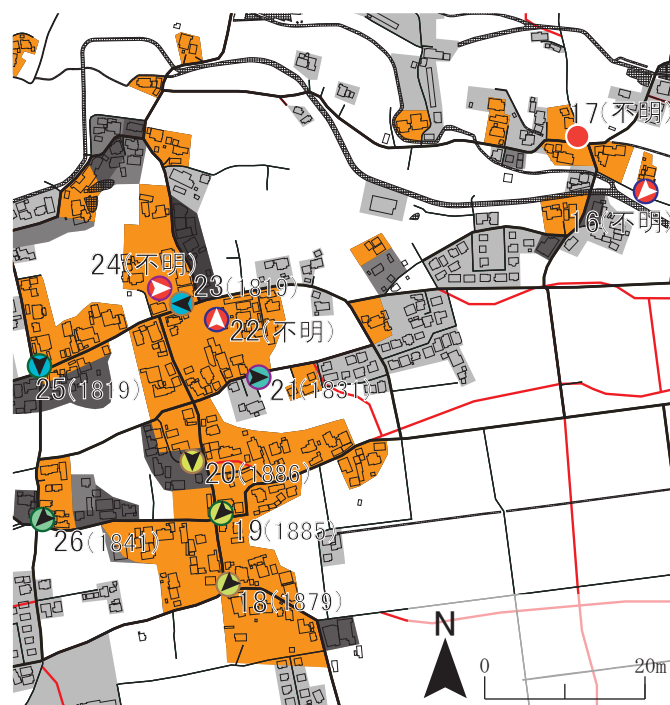


图 7-3 等々力地区拡大図

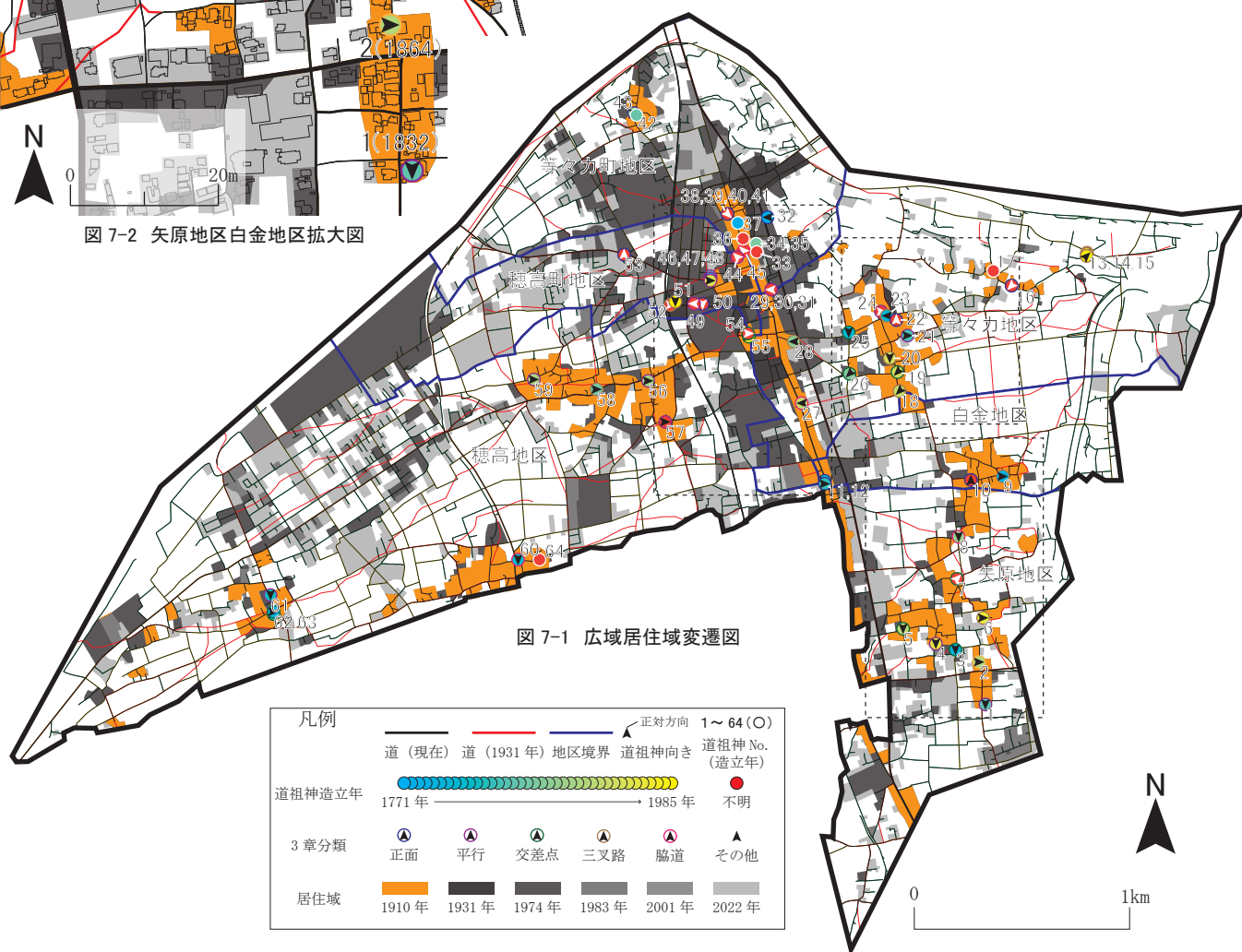


图 7-1 広域居住域変遷図

图 7 居住域変遷図

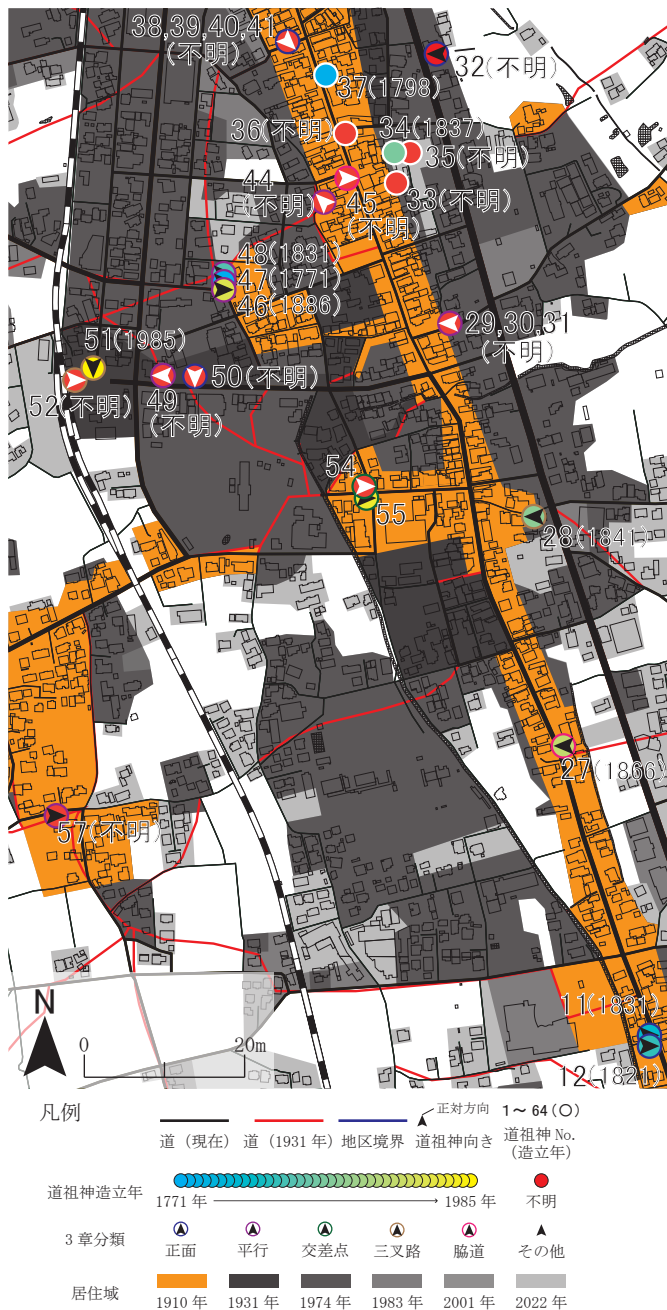


図 7-4 穂高地区拡大図

道祖神」は居住域境界の空間認知が現れている道祖神であることが推測できる。

2) 矢原地区集落・白金地区集落

旧東穂高町南東部に配置する、矢原地区集落と白金地区集落について分析する（図 7-2 参照）。まず、各道祖神の造立年に着目する。古い順に、矢原地区は No. 3、No. 1、No. 8、No. 2、No. 5、No. 4、No. 6。白金地区は No. 4、No. 3 である。次に、居住域との関係に着目する。1910 年の居住域の境界に配置しているものは 10 基中 6 基（No. 1、No. 3、No. 4、No. 6、No. 7、No. 8）が確認できる。その中でも、No. 7 は現在まで変化せず居住域の境界に配置している。次に道祖神の向きに着目する。10 基中 10 基（No. 1 と No. 2、No. 3 と No. 4 と No. 5 と No. 6 と No. 7、No. 8 と No. 9 と No. 10）はそれぞれが囲む居住域の中心に対して外側を向いていることが確認できる。

3) 等々力地区集落

旧東穂高町北東部に配置する、等々力地区集落について分析する（図 7-3 参照）。まず、各道祖神の造立年に着目する。古い順に No. 23、No. 25、No. 21、No. 26、No. 18、No. 19、No. 20 である。居住域との関係に着目する。1910 年の居住域の境界に配置しているものは 11 基中 4 基（No. 17、No. 23、No. 25、No. 26）が確認できる。その中でも No. 26 は現在まで変化せず居住域の境界に配置している。次に道祖神の向きに着目する。11 基中 7 基（No. 17、No. 18、No. 19、No. 20、No. 21、No. 25、No. 26）はそれぞれが囲む居住域の中心に対して外側を向いていることが確認できる。No. 23、No. 24 は東光寺の参道の軸に向いている。

4) 穂高駅周辺

旧東穂高町中央部に配置する、等々力町地区・穂高町地区・穂高地区を横断する穂高駅周辺について分析する（図 7-4 参照）。まず、各道祖神の造立年に着目する。古い順に No. 47、No. 37、No. 40、No. 12、No. 11、No. 48、No. 34、No. 28、No. 27、No. 46、No. 55、No. 51 である。居住域との関係に着目する。1910 年の居住域の境界に配置しているものは 28 基中 11 基（No. 47、No. 48、No. 34、No. 28、No. 46、No. 29、No. 30、No. 31、No. 33、No. 35、No. 44）が確認できる。その中でも現在まで変化せず居住域の境界に配置している道祖神は無い。これは旧千国街道と国道 147 号周辺を軸に大規模な居住域拡大が理由であると推測できる。

次に、道祖神の向きに着目する。28 基中名 19 基（No. 11、No. 12、No. 27、No. 28、No. 29、No. 30、No. 31、No. 32、No. 36、No. 39、No. 40、No. 41、No. 44、No. 45、No. 46、No. 47、No. 48、No. 54、No. 55）が旧千国街道を軸に内側を向いていることが確認できる。これらの道祖神は他地区の道祖神が居住域外側を向いているのに対して、居住域内側を向いている。

5) 各居住域の比較

居住域と道祖神配置の関係について各居住域間で比較すると、集落居住域と旧千国街道居住域で居住域に対して道祖神の向いている方向が反転していることが明らかになった。これは内と外の空間認知が反転していることが推測される。集落居住域では居住域外つまり道祖神が向いている方が外と認知している。一方で、道祖神の向いている方向が外であるとすれば、旧千国街道の街道を外、街道外を内と認知していると考えられる。街道を通して人や物が運ばれるなかで、悪霊や疫病が各集落の方向に入り込まないように街道方向に道祖神が向いていることが推測される。

4-2. 道祖神と都市変容の関係性

1910 年居住域外に配置されている道祖神を除き、「平行配置道祖神」、「交差点道祖神」、「三叉路道祖神」に類型される道祖神は造立時からある時点まで居住域の境界に位置していると仮定する。これらの内側が 1910 年以前の居住域であったと推測できる。道祖神と都市変容の関係性を図式化した（図 8 参照）。年代別の居住域と道祖神の関係について図 8 ①のように居住域と居住域外の境界に道祖神が配置する場合「境界」、図 8 ②のように居住域内側に道祖神が配置する場合「内」、図 8 ③のように居住域外に道祖神が配置する場合「外」とする。また、1910 年の居住域に対する道祖神の向きについて、図 8 ①のように境界に沿った方向を向いている道祖神を「境界向き」、図 8 ②のように居住域中心部を向いている道祖神を「内向き」、図 8 ③のように居住域中心部に対して反対を向いている道祖神を「外向き」とする。

表 4 旧東穂高町道祖神と居住域の変化の関係

No.	区名	形態	高さ (cm)	管理状況	3章の類型	1910年居住域 に対する向き	造立年	年代別居住域と各道祖神の位置関係								
								1750年代	1800年代	1850年代	1910年	1931年	1974年	1983年	2001年	2022年
1	Y	文字碑	38	路傍	平行配置	外	1832									
2	Y	握手像	92	路傍	直交配置	境界	1864									
3	Y	握手像	94	社	交差点	外	1819									
4	Y	酒器像	88	社	平行配置	外	1892									
5	Y	その他	98	社	交差点	外	1864									
6	Y	握手像	72	壇	三叉路	内	1897									
7	Y	握手像	42	社	交差点	外	不明									
8	Y	酒器像	94	路傍	脇道	外	1858									
9	S	握手像	65	路傍	三叉路	外	1806									
10	S	文字碑	17	壇	直交配置	境界	不明									
11	S	握手像	74	壇	直交配置	内	1831									
12	S	文字碑	60	社	直交配置	内	1821									
13	T	文字碑	26	社	三叉路	無	不明									
14	T	握手像	62	壇	三叉路	無	1979									
15	T	握手像	42	社	三叉路	無	1979									
16	T	文字碑	36	壇	直交配置	境界	不明									
17	T	その他	31	社	私有地	不明	不明									
18	T	握手像	77	壇	三叉路	外	1879									
19	T	握手像	86	壇	交差点	外	1885									
20	T	文字碑	36	壇	三叉路	外	1886									
21	T	握手像	68	壇	平行配置	外	1831									
22	T	その他	23	壇	直交配置	外	不明									
23	T	握手像	105	路傍	三叉路	内	1819									
24	T	その他	81	壇	直交配置	内	不明									
25	T	酒器像	86	壇	交差点	外	1819									
26	T	握手像	89	路傍	交差点	外	1841									
27	T	酒器像	72	壇	脇道	内	1866									
28	T	握手像	90	路傍	三叉路	内	1841									
29	TT	文字碑	53	路傍	平行配置	内	不明									
30	TT	文字碑	24	路傍	平行配置	内	不明									
31	TT	文字碑	26	路傍	平行配置	内	不明									
32	TT	握手像	117	路傍	直交配置	無	不明									
33	TT	文字碑	21	路傍	私有地	不明	不明									
34	TT	酒器像	70	路傍	私有地	不明	1837									
35	TT	握手像	81	社	私有地	不明	不明									
36	TT	文字碑	30	路傍	移設	不明	不明									
37	TT	握手像	53	社	移設	不明	1786									
38	TT	文字碑	37	社	直交配置	内	不明									
39	TT	文字碑	50	路傍	直交配置	内	不明									
40	TT	握手像	106	路傍	直交配置	内	1798									
41	TT	握手像	35	壇	直交配置	内	不明									
42	TT	文字碑	16	社	私有地	不明	1833									
43	TT	握手像	165	社	直交配置	内	1841									
44	HT	握手像	77	社	平行配置	外	不明									
45	HT	握手像	66	社	脇道	内	不明									
46	HT	握手像	60	社	平行配置	内	1886									
47	HT	文字碑	85	壇	平行配置	内	1771									
48	HT	文字碑	59	壇	平行配置	内	1831									
49	HT	握手像	48	路傍	平行配置	無	不明									
50	HT	その他	67	社	直交配置	無	不明									
51	HT	握手像	115	壇	三叉路	無	1985									
52	HT	握手像	113	壇	三叉路	無	不明									
53	HT	文字碑	59	路傍	直交配置	無	不明									
54	H	握手像	71	路傍	交差点	内	不明									
55	H	文字碑	90	路傍	交差点	内	1953									
56	H	握手像	85	壇	平行配置	内	1858									
57	H	文字碑	63	路傍	平行配置	内	不明									
58	H	握手像	138	路傍	三叉路	内	1833									
59	H	握手像	80	路傍	平行配置	内	1858									
60	H	握手像	84	路傍	脇道	内	1824									
61	H	文字碑	65	路傍	平行配置	内	1824									
62	H	握手像	110	社	交差点	内	1824									
63	H	文字碑	40	壇	交差点	内	1818									
64	H	握手像	72	路傍	私有地	不明	不明									

凡例

区名	Y: 矢原地区	S: 白金地区	T: 等々力地区
	TT: 等々力町地区	HT: 穂高町地区	H: 穂高地区
年代別居住域と道祖神の関係	境界 居住域に対して図11①のような配置関係を分類する	内側 居住域に対して図11②のような配置関係を分類する	外側 居住域に対して図11③のような配置関係を分類する
1910年以前の居住域と道祖神の関係推測	境界(推測)	境界(推測) 造立年不明	関係不明

1910年居住域に対する向き

境界向き	図11の①のように居住域と居住域外境界に沿った方向を向いている道祖神
内向き	図11の②のように居住域中心部の方向を向いている道祖神
外向き	図11の③のように居住域中心部と逆方向を向いている道祖神
不明	私有地内に位置しており、方向が確認できない道祖神
無	1910年時点で造立していない道祖神

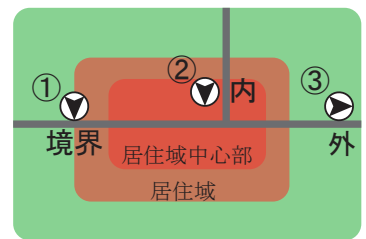


図 8 居住域と道祖神の向きの関係（模式図）

次に地区別に分析する。

1) 矢原地区集落

矢原地区集落はNo. 1、No. 3、No. 4、No. 5、No. 6、No. 7 が囲む範囲に居住域があったことを推測できる。各道祖神の造立年に着目すると、集落内で最も古い道祖神は1819年に造立されたNo. 3である。造立から1910年までのある時点まで、道祖神が境界として認知されていたと想定するとNo. 3の北部から順に集落が発展していったことが推測される。

2) 白金地区集落

白金地区集落はNo. 8、No. 9 が囲む範囲に居住域があったことを推測できる。各道祖神の造立年に着目すると、集落内で最も古い道祖神は1806年に造立されたNo. 9である。造立から1910年までのある時点まで、道祖神が境界として認知されていたと想定するとNo. 9の西部から順に集落が発展していったことが推測される。

3) 等々力地区集落

等々力集落はNo. 18、No. 19、No. 20、No. 21、No. 23、No. 25、No. 26 が囲む範囲に居住域があったことを推測できる。各道祖神の造立年に着目すると、集落内で最も古い道祖神は1819年に造立されたNo. 23とNo. 25である。造立から1910年までのある時点まで、道祖神が境界として認知されていたと想定するとNo. 23の西部とNo. 25の東部に囲まれた範囲から順に集落が発展していったことが推測される。

4) 旧千国街道保高宿

旧千国街道保高宿はNo. 28、No. 29、No. 30、No. 31、No. 33、No. 34、No. 35、No. 44、No. 46、No. 47、No. 48、No. 54 が囲む範囲に居住域があったことを推測できる。各道祖神の造立年に着目すると、保高宿で最も古い道祖神は1771年に造立されたNo. 47である。造立から1910年までのある時点まで、道祖神が境界として認知されていたと想定するとNo. 47の東部から順に集落が発展していったことが推測される。

5) 穂高地区本郷集落

穂高地区東部集落はNo. 56、No. 57、No. 58、No. 59 が囲む範囲に居住域があったことを推測できる。各道祖神の造立年に着目すると、集落内で最も古い道祖神は1833年に造立されたNo. 58である。造立から1910年までのある時点まで、道祖神が境界として認知されていたと想定するとNo. 58の西部から順に集落が発展していったことが推測される。

6) 穂高地区上原集落

穂高地区西部集落はNo. 61、No. 62、No. 63 が囲む範囲に居住域があったことを推測できる。各道祖神の造立年に着目すると、集落内で最も古い道祖神は1818年に造立されたNo. 63である。造立から1910年までのある時点まで、道祖神が境界として認知されていたと想定するとNo. 63の西部から順に集落が発展していったことが推測される。

4-3. 都市変容と道祖神信仰の都市アイデア

年代別の居住域と各旧穂高町域道祖神の関係について表に示す（表4参照）。1931年から1974年の間に大きく居住域が拡大している。その間に居住域境界に位置していた道祖神も居住域の内側に配置するようになった。これは道祖神信仰の空間認知が大きく喪失したタイミングであるといえる。

次に年代ごとに道祖神信仰の形成する空間認知の都市アイデアとしての役割を分析する。

1) 戦前

1931年までの都市変容と道祖神信仰の形成する空間認知の都市アイデアを分析する。この時期の旧穂高町域における主な変化として、1650年千国街道保高宿が開く、1816年拾ヶ堰開削、1874年保高町村・保高村・矢原村・白金村・貝梅村・等々力町村・等々力村が合併し東穂高村誕生、1916年信濃鉄道松本－大町開通、1921年東穂高村が穂高町に改称などが挙げられる。また、1810年代後半から開田が盛んに行われ、穂高地区上原集落などの集落が発生し始めた。対象とする旧穂高町域道祖神は1910年までにほとんどが造立している。1910年から1931年の間に居住域の境から内側に变化した道祖神はNo. 23のみであった。このことから、1910年まで居住域境界に配置する道祖神の示す境界の空間認知は道祖神造立から1931年まで都市アイデアとして、都市変容を規定してきたと言える。

2) 戦後から高度経済成長期

1931年から1974年までの都市変容と道祖神信仰の形成する空間認知の都市アイデアを分析する。この時期の旧穂高町域における主な変化として、1954年に穂高町・有明村・西穂高村・北穂高村が合併し改めて穂高町誕生、1953年に国道147号施行、松本・諏訪地区が新産業都市に指定され穂高町の工業開発が始まるなどが挙げられる。1931年から1974年の間に居住域の境から内側に变化した道祖神は20基中14基である。このことから、この時期に大きく都市が変容し、多くの道祖神が形成する空間認知の都市アイデアは喪失していったと考えられる。

3) 高度経済成長期後から現在

1974年から2022年現在までの都市変容と道祖神信仰の形成する空間認知の都市アイデアを分析する。この時期の旧穂高町域における主な変化として、2005年に穂高町・豊科町・堀金村・三郷村・明科町が合併し安曇野市誕生などが挙げられる。1974年から2022年現在の間に居住域の境から内側に变化した道祖神は1974年から1983年の間に变化したNo. 4、No. 17、No. 57、2001年から2022年の間に变化したNo. 4の4基である。また、造立時から現在まで居住域の境界に配置している道祖神は現在居住域の境界に配置する道祖神は矢原地区のNo. 1、No. 7、等々力地区のNo. 26である。これらの道祖神に現れている空間認知は道祖神造立時から約100年間以上都市アイデアとして、都市変容を規定してきたと言える。

5. まとめ

5-1. 道祖神信仰からみる伝統都市から現代都市への変容

本研究では安曇野市道祖神信仰を対象に、道祖神の空間配置特性を把握し、居住域変容との関係を明らかにすることによって、道祖神信仰が形成した空間認知を都市アイデアとして捉え、都市空間との関係を考察した。

2章では、安曇野市道祖神信仰について調査資料などの文献調査から全体を把握した。

3章では、安曇野市旧穂高町域における道祖神と都市空間との関係をいくつかの指標から整理した。道祖神の空間配置特性を明らかにするためには、道祖神単体ではなく、周辺や集落との関係分析が有効であると考え、指標の中から旧穂高町域道祖神を接道の形態と道路に対する配置方向を用いて対象とする道祖神64基の類型化を行った。これらをそれぞれ、「直交配置道祖神」、「平行配置道祖神」、「交差点道祖神」、「三叉路道祖神」、「脇道道祖神」と命名した。次に年代別居住

域を重ね合わせた居住域変遷図を制作し、類型ごとの色分け道祖神の向き、造立年を示した道祖神をプロットした。対象とした道祖神のうち、1910年時点で造立している60基中53基が1910年居住域内に位置することが明らかになった。そのうち、居住域境界部に配置する道祖神が22基、内部に配置する道祖神が32基、外部に配置する道祖神が6基であった。類型の関係を分析すると、「平行配置道祖神」「交差点道祖神」、「三叉路道祖神」が居住域の境界に配置している道祖神が多い。特に「平行配置道祖神」は16基中10基が1910年居住域の境界に配置していることが明らかになった。これは道祖神信仰の境界を守護する意味合いが強く表れている道祖神の配置特性であると考えられる。先人たちの境界の空間認知を読み取ることができる。次に居住域と道祖神配置の関係について各居住域間で比較すると、集落居住域と旧千国街道居住域で居住域と道祖神の向きの関係が反転していることが明らかになった。これは内と外の空間認知が反転していることが推測される。道祖神の配置特性には自他との関係から空間認知が形成され道祖神に現れていると考えられる。

4章では、「平行配置道祖神」「交差点道祖神」、「三叉路道祖神」に類型する道祖神は境界に位置していたと推測できることからこれらに類型する道祖神を1910年以前に居住域の境界に位置していたと仮定し、道祖神と都市変容の関係性を分析した。居住域ごとに分析をすると集落の広がり方を年層的に推測することができた。

5-2. 都市アイデアとしての道祖神信仰

居住域と道祖神の配置関係に着目することで年代ごとに道祖神信仰の形成する空間認知の都市アイデアと都市変容の関係を分析した。戦前までの時期は、道祖神が集落の境界から内側に変化することはなく、道祖神信仰が形成する社会的な意識と空間的な意識の表れとして道祖神が存在しており、都市アイデアとして居住域内外を境界として分け、都市の範囲を規定していたと言える。戦後から高度経済成長期までの時期は、国道施行や工業開発が始まるなどなど、都市が大きく変化し、道祖神は居住域の内側に配置が変化するようになった。この時期から道祖神信仰の形成する空間認知は境界という認知を失っていき、都市アイデアとしての役割を損失していったと考えられる。高度経済成長期から現在までの時期は、境界に配置する道祖神は減っていき、現在居住域の境界に配置する道祖神は矢原地区のNo. 1、No. 7、等々力地区のNo. 26である。矢原地区、等々力地区に配置する道祖神は基壇部の「壇型」、「社型」が他地区と比較して多く類型され、より道祖神が生活に身近であることから、道祖神信仰が形成する空間認知が約200年という長い間残存しているのではないかと考えられる。

以上より、伝統都市において祀られ管理されてきた石造祠の一例である安曇野市道祖神信仰に着目し、道祖神信仰が形成した空間認知を都市アイデアとして捉え、都市空間との関係を明らかにすることができた。道祖神のような日常の景色に潜む伝統都市の形成した地域特性は大きく現代都市には現れていないものの、現代都市の深層に埋め込まれていると考える。このような潜在的な地域特性を見出す試みは、人口減少が進み都市の再編が求められる日本の地方都市においては、地域の固有性や多様性を活かした住民主体のまちづくりを進めるうえで重要な要素であると考えられる。

5-3. 今後の展望

本研究は安曇野市の道祖神の残存数が多く、資料が豊富であることから、現代に配置されている位置から移設していないと仮定しても問

題ないと判断し分析を行った。石造祠は基壇に固定されていない場合、簡単に移動させることや破壊することが可能であるため、実際には造立時は異なる位置に配置されていた可能性もある。

本研究は安曇野市旧穂高町域に対象を絞り分析を行ったが、今後は異なる地域においても、同様の結果を得られるかどうか検討する必要があると考える。

このような地域特有の概念と空間意識を明らかにすることは、都市計画やまちづくりにおいて、行政と住民が都市・地域の形や範囲などの在り方について議論する際に共有できる認識になると考える。今後はどのように都市の将来像について計画に反映できるかが重要であると考えられる。

【注】

- 注1) 大量生産・大量消費を基調とする資本主義システムとともに普及した都市類型である現代都市と対比する日本を含め世界各地において個性豊かな社会や文化を成熟させてきた都市類型。これらは現代都市の増殖に伴って急速に破壊・解体されてきた。参考文献1)
- 注2) 国土交通省は本格的な人口減少社会の到来により、地域の存続が危ぶまれており、多様性の維持・発展が困難になる恐れがあることから国土計画のなかで、「各地域が主体性を確立し、固有性を深め、「多様性」を再構築する」と提示している。参考文献22)
- 注3) 石でできた祠のこと。自然石のままのものから形を整えたものもある。
- 注4) 都市アイデアのうち、御塚や城壁、都市計画など都市を大きく規定してきた大きい都市アイデアに対して、人々の行動、意識などの都市を小さく規定してきたと推測できる都市アイデアを小さい都市アイデアとする。
- 注5) 人々の定住領域である集落と生産の場である耕地との境に関わり、集落外の悪魔な霊的存在や目に見えぬ災疫が集落内に入らぬよう願うものであり、悪魔な疫病神とそれを防塞する塞の神として伝承が伝えられている地方もある。この信仰は、安全な生活領域としての集落の形成維持に関わる象徴的側面として解釈されており、「場所の守護神」信仰とも言える。参考文献23)
- 注6) 「社会的な意識」は占有・防御の印であり、地域集団とその空間に対する縄張り意識や帰属意識の現れのこと。社会集団のアイデンティティーの確立とともに「社会的な意識」の境界は強くなる。「空間的な意識」は川や谷や山のような境界を見出すこと。このような境界を作り出すための疑似的な障害物を置くことで、連続する空間を遮断し、境界を作る。このような障害物は内外、自他を明確にする。これらの空間認知は各個人が持つものではなく、Lynchが著書「都市のイメージ」で示した、たくさんの人々の間に一致が見られるパブリックイメージのことである。参考文献24) 参考文献25)
- 注7) 都市変容が変容する過程で拡充の方向性や広がり方を方向づける。例として、伊藤は城下町のアイデアを示した。文化的周辺にあり、独自の文化を形成することがなかった武士が織田信長・豊臣秀吉によって天下統一されると、政治の頂点を極めた。これらの特異な歴史が城下町という都市を形成した。信長は「天」のシンボルズムを天主で表現し、垂直方向の視線のアイデアと内部を飾った図像のアイデアをプロラムした。「天」からの視線支配は城下町のプランに反映された。その後、平和な時代が訪れ、垂直性を失い、水平性の強い都市へと推移していく。ここでは単一のアイデアが全体を貫くことはなく、複数のアイデアが共存する都市として成熟した。参考文献1)
- 注8) 世界の神聖性を否定し、宗教的前提を一切拭き去った生のみを受け入れる精神的な営み。参考文献6)
- 注9) 「俗なるもの」と対照をなす宗教的前提をもった精神的な営み。参考文献5)
- 注10) 宗教的価値に充ちた世界に住む人間。さまざまな文化から同様な営みを確認できる。参考文献5)
- 注11) 宗教的人間にとって、聖なるものは力であり、実在と永遠性と造力とを同時に意味する。実在にあやかり、聖なるもののなかで、あるいは浄められた事物のすぐそばで生活しようと努める宗教的人間の傾向がある。参考文献5)
- 注12) 穂高神社境内には北安曇郡八坂村や生坂村に祀られていたが、住民の離村や移住によって祭祀者がなくなったために、穂高神社に託され祀られた4基がある。また、大王わさび農園などには「商売繁盛」や「家内安全」を祈念した、個人的に道祖神を造立する傾向がある。参考文献9)
- 注13) 拾ヶ村組合郷、略して拾ヶ郷。1816年に完成し、引き続き行われた開田事業によって、拾ヶ郷から下の地域は一面の水田に変わった。参考文献19)
- 注14) 道祖神の名前は時代や地域によって複数あり、道祖・道祖神・幸神・塞神などがある。呼び名と同様に意味合いも次第に増加していった。旅の安全を守る・夫婦神であり縁結びの神・境界に関わり、人や家、地域などの様々な物を守護する・村や子供を守護するなどである。参考文献11)
- 注15) 長野県松本市市街地と周辺からなる盆地。塩尻市周辺の松本平と安曇野市周辺の安曇平に分けられる。
- 注16) 石造文化財調査は1992年より始まり、1993年4月にはほぼ調査を完了した。本研究ではこれらの調査を基に分析をする。また、これらの調査以降に造立された道祖神は個人で造立した道祖神となるため、本研究の調査対象として該当しない。参考文献9)
- 注17) 「道祖神」と文字で記した碑。参考文献9)
- 注18) 男神と女神が陽印されていて、内側の手は互いの肩に回して肩を組み合う形をとり、外側の手は中央で握り合っている碑。参考文献9)
- 注19) 握手像と同じように、男神と女神が陽印されていて、内側の手は互いの肩に回して肩を組み合う形をとり、男神が大杯を持ち、女神は瓢箪が提子を持って、酒を注ぐようにしている碑。参考文献9)
- 注20) 男神が神官の持つような笏を持ち、女神は櫛扇を持っている「笏扇像」や、子供も陽印されている「子育て道祖神」など例外的な碑。参考文献9)
- 注21) 対象として除外した道祖神は11基。内訳は大王わさび農園に位置する道祖神が9基、

記念碑的な意味合いの道祖神が2基である。現代の安曇野市における道祖神の意味合いは変化しているが、道祖神が生活の身近に存在していることが伺える。

- 注 22) 石を削り、「文字碑」であれば道祖神、「握手像」であれば男神と女神が刻まれている面。参拝する際に向き合う面。
- 注 23) 住居が立つ所有地。福田のいうムラ領域であり、外側には田畑などの生業領域である福田のノラ・ヤマ領域がある。参考文献 26)
- 注 24) 対象とする安曇野市旧穂高町域に位置する道祖神を識別するために No. 1 ～ No. 64 の番号を付けた。矢原地区、白金地区、等々力地区、等々力町地区、穂高町地区、穂高地区の順に番号を付けた。また、表 4 の No. と対応する。
- 注 25) 分類が判断できない道祖神は等々力地区に1基、等々力町地区に6基、穂高地区に1基である。これらは現在、私有地敷地内に位置しており、碑文に着目すると、「保高井口氏」、「保高 近江屋」、「岡村氏」など個人の名称が彫られているため、造立時から私有地の敷地内に位置している道祖神であると推測できる。
- 注 26) 造立年が最も古い道祖神は移設や壊されてしまったり、年代が確認できない道祖神である可能性はある。
- 注 27) 現在松本・糸魚川間を結ぶ道路に、南北に安曇野市を横断する糸魚川街道（国道 147・148 号線）がある。古くは千国大道、千国街道が同様に横断していた。近世には、主要道路として重要な役割を果たしてきた。穂高においては、この道路を挟んで、保高町村・等々力町村の地籍に中世から近世にかけて発達したのが穂高宿である。参考文献 19)

〔参考文献〕

- 1) 伊藤毅：伝統都市1アイデア，東京大学出版会，pp v - x i v，2010
- 2) J. Rykwert（前川道郎，小野育雄 訳）：〈まち〉のアイデア－ローマと古代世界の都市の形の人間学－，みすず書房，1991
- 3) 伊藤毅：伝統都市1アイデア，東京大学出版会，pp3-38，2010
- 4) 陣内秀信：伝統都市1アイデア，東京大学出版会，pp39-69，2010
- 5) M. Eliade（風間敏夫 訳）：聖と俗 宗教的なものの本質について，法政大学出版局，1969
- 6) R. Hester（土肥真人 訳）：エコロジカルデモクラシー まちづくりと生態的多様性をつなぐデザイン，鹿島出版会，2018
- 7) 竹内泰，布野修司：京都における地蔵の配置に関する考察，日本建築学会計画系論文集 第520号，pp263-270，1999
- 8) 竹内泰，牧紀男：京都における地蔵の配置変化とその要因に関する考察，日本建築学会計画系論文集，第84巻，第764号，pp2129-2138，2019
- 9) 穂高町石造文化財編さん委員会：穂高町の石造文化財 解説・資料編，穂高町教育委員会，1994
- 10) 穂高町石造文化財編さん委員会：穂高町の石造文化財 写真編，穂高町教育委員会，1994
- 11) 倉石忠彦：安曇野の道祖神ものがたり，安曇野市教育委員会，2022
- 12) 安曇野市：市の概要，安曇野市 HP（参照 2023. 01. 28）
<https://www.city.azumino.nagano.jp/soshiki/7/10798.html>
- 13) 穂高町：町の概要，穂高町 HP(2005. 12. 01 アーカイブ)，（参照 2023. 01. 28）
https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/258799/www.town.hotaka.nagano.jp/town_admin/profile/profile02.html
- 14) 南安曇郡誌改訂編纂会：南安曇郡誌 第2巻下，南安曇郡誌改訂編纂会，1962
- 15) 鈴木英恵：東西にみる道祖神の現状，年報非文字資料研究，7巻，pp457-478，2011
- 16) 高原正文：安曇野史への招待，信毎書籍出版センター，2011
- 17) 倉石忠彦：道祖神伝承論・碑石形態論，岩田書院，2021
- 18) 穂高町誌編纂委員会：穂高町誌 自然編，穂高町誌刊行会，1991
- 19) 穂高町誌編纂委員会：穂高町誌第二巻（歴史編 上・民俗編），穂高町誌刊行会，1991
- 20) 穂高町誌編纂委員会：穂高町誌第三巻（歴史編 下），穂高町誌刊行会，1991
- 21) 安曇野市：道祖神めぐり，安曇野市 HP（参照 2023. 01. 28）
<https://www.city.azumino.nagano.jp/soshiki/32/10239.html>
- 22) 国土交通省：国土のグランドデザイン2050 ～対流促進型国土の形成～，国土交通省 HP（参照 2023. 01. 28）
https://www.mlit.go.jp/kokudoseisaku/kokudoseisaku_tk3_000043.html
- 24) 上田元：領域性概念と帰属意識－諸概念の展開とそのメタ地理学的反省－，人文地理学会，第38巻，第3号，1986
- 24) 倉石忠彦：都市と道祖神信仰，国立歴史民俗博物館研究報告，第103集，2003
- 25) L. Lynch（丹下健三，富田玲子 訳）：都市のイメージ，岩波書店，1968
- 26) 福田アジオ：日本村落の民俗的構造，弘文堂，1982